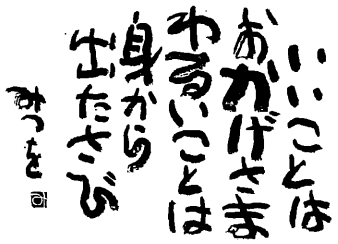
さくら第483号
令和 2年3月

さくら

発行所　さくらそろばん
発行者　平瀬重雄
春江町境17-7:TEL51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp



『おみくじでの対応は…』

3月は入試の時節であり神社やお寺では参拝したあとおみくじを引き、大吉が出たと喜こび、凶を引いてしまったと沈んだ顔で小枝やみくじ掛けのヒモに結ぶ人を多く見かけます。

正月に神社でお詣りしたあと、学問の神様である菅原道真公をお祀りする「**天満宮**」でおみくじを引く家族連れをよく見かけます。

おみくじには引いたその時の運勢を説明する吉凶を示す順番があり、神社によって違います。大吉、吉、中吉、小吉、半吉、末吉、末小吉、平、凶、小凶、半凶、末凶、大凶と細かく分かれているものもあります。それぞれの吉凶を**偈文(げもん)**という5言4句の漢詩や和歌で説明が書かれています。

さて、おみくじのルーツはと言えば、平安時代、京都の比叡山延暦寺の偉いお坊さんである元**三慈恵大師良源上人**(がんざんじけいだいしりょうげんしょうにん・912年～985年)が広めたといいます。

延暦寺には「**みくじ堂**」があり、おみくじ発祥の地という石の柱も建っています。

1番～100番までの数字を書いた100本の細いみくじ棒を入れた6角形の筒を祈りながら振り、小さな穴から出てきたみくじ棒の番号と同じ数字の説明書きをいただき、吉凶を占います。くじ引きの方式には、あらかじめ折り畳まれたくじを専用の箱に入れるか、三方(さんぽう)という入れ物に置き、参拝者自身が選ぶものや、自動販売機にお金を入れて引くものがあります。神社やお寺には独特のやり方があり、1m四方のガラスケースの中に張り子の獅子がいて200円を入れると、その獅子が舞いながらお札をくわえ、受取口に運ぶのもあるなどいろいろ工夫され、楽しませてくれます。

くじは漢字で「籤」と書き、尊敬する意味の御(み)をつけて、みくじ、御籤、御御籤、御神籤などいろいろあるようです。

ところで、このおみくじを作っているところが山口県にあり「女子道社」といい、全国6カ所にあるおみくじ作成社のなかでもその70%がここで作成されているそうです。

明治時代に近くの神社の宮司さんが「女子道」という機関紙を作り、女性の地位向上に努めたといい、その資金を集めるためにおみくじ製造を始めたといいます。

1906年明治39年にはおみくじの自動販売機も作成し、神前結婚式も推奨したそうです。

昔から言われていることに「困った時の神だのみ」があります。自分では迷って決めにくい時などにおみくじを引くことがあります。

そもそもおみくじは、政治や天皇を決める時などの大事な時に使われており、神仏からのメッセージとして使われていました。そのころは、吉凶などではなく、何かを決めるための手段、方法であって、運勢を占うものではなく、くじ引きによって重要なことを決めたという歴史があります。それが、江戸時代にはいり今のような形になったそうです。

ちなみに、正月3日間に日本一多い316万人が詣でる明治神宮のおみくじは「**大御心**」といい、吉凶はなく、詩文や和歌が書かれてあり、吉凶の順番より神様や仏様のありがたいお言葉に触れる事です。

大吉だからと油断せず、凶は最悪だと嘆かずこれから先は運気が必ず上がると前向きに思えば気持ちがすっきりします。

たとえ凶を引いても、そのなかに書いてある和歌や言葉のなかで自分にとってプラスとなる事柄だけを残せばよいのです。明るくするか落ち込むかは気持ちの持ちようですね。